
Best Friend

梓衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Best Friend

【ZZマーク】

ZZ992K

【作者名】

梓衣

【あらすじ】

西野カナさんの「Best Friend」をもとにした、友情ストーリーです。

(前書き)

クリックありがとうございます

この作品は、西野力ナさんの「Best Friend」とこの曲に、物語をつけたおはなしです。

梓衣の2つ目の作品となります

どうぞ最後まで読んでくださいっ！！

「おせよつ

晴れ渡り、透き通った青色の空と、ぴんくの満開に咲いた桜がベ
スマッシュした今日の朝。

卒業するまであと一回となつた今日、昨日とおんなじ朝を過ぎせ
るのも、この日まで。

「おせよつ

水木志織。中学3年生。

「なんで明日卒業式なのに今日授業あるんだりつむ

高森恵梨香。あたしのしんむつ

「ほんとだよね。ムードわかんない校長つて最悪

「だよね」

-キーンローンカーーンローン-

「起立、礼、着席」

今日も昨日と変わらず、落ち着きがない3年E組。
まだみんな、「別れ」とか気にしてないんだろうな。

前の席の朱莉^{あかり}に話しかける恵梨香。

後ろの席の美里に話しかけられる美羽。

そんなの気にしないで黒板に数字を書く、数学の山下先生。
その字を真剣に映す、学年トップの小野田さん。
みんな、いつもどおりすぎる。

たぶんそういうの、気にしたくないんだろうな。

ここで悲しくなつて泣いちゃつたら恥かくのは自分だもんね。
クラスの空氣^{くうき}だって重くなつたらいやだしね。

あたしも普段通りに窓の外を見つめてボーっとする。

鮮やかなぴんくの満開の桜はとっても綺麗。

あたしには、卒業を気にしないでなんて居られなかつた。
しんゆうの恵梨香との別れを考えると、気持ちがむずむずする。

あたしと恵梨香はただの仲のいい親友じゃない。

ふたりにはある共通点がある。

あたしも恵梨香も、彼氏がいる。

あたしの彼氏も恵梨香の彼氏も、みんなの彼氏よつはあたしと恵梨香のこと考えてくれてる。

だつて、おなかには赤ちゃんがいる。

あたしは妊娠3カ月。

恵梨香は4カ月。

まだ他の人は知らない。

ママもパパも、先生も友達も。

あたしと恵梨香だけが知つてゐる、本当の辛さとか、眞実とか。お互いを知り合つてゐるから、恵梨香はわたしのこと、わかってくれる。

誰よりも、わかってくれる。

「起立、礼、ありがとうございました」

ちょっと考え方をしてゐる間に、長かった授業はおわつていた。

「志穂、トイレ行ーーーっ」

「うん」

授業がおわつてすぐ、恵梨香が走つてきた。

「起きてから一回もトイレ行ってなくてえ、授業中ずっとこきた
かつたんだけじつ」

「我慢しなくてよかつたの?」

「えーっ。授業中トイレに行くのって恥ずくなつ?」

「まあね」

「じゃあいいじで待つて」

「うそ」

あたしはトイレの水道のところで待たれて、恵梨香はダッシュで個室に入つて行つた。

恵梨香は彼氏と上手くこつこつみたいで、最近はずつと笑顔でいる。

実はあたしは「んとこじるやうにやうにやうに」して、もしかしたら別れることになるかもしねなくて。

赤ちゃんもいるから困つて。

誰かに相談したいけど、恵梨香は幸せそうだから、なかなか言いづらくて。

鏡に映つたあたしは笑つていなかつた。

無理をして笑おうとおもつても、不安が募つた笑顔になる。

「上手くいかないね」

急に「うしろから声がした。
鏡には心配した顔の恵梨香が映っていた。

「びっくりしたあ

笑えてなかつたことが恵梨香にバレたら、恵梨香は絶対心配する
し。

バレないよ」、精一杯の笑顔をつくる。

「最近志織ふつうじやないよ？」

恵梨香はあたしが悩んでいること、わかつてたみたい。
でも、心配はかけられない。

「ええ？全然ふつうだよ。恵梨香がおかしいんじゃないの？」

「そんなよつこは思えないけど？」

さすがに恵梨香はだませない。

「心配しますがだよ。平氣だつた言つてるの」

「だめだよ志織つ。ちやんと言つて」

そういうえば、恵梨香はあたしの「こと、ちやんと怒つてくれんだつた。

でもあたしは、恵梨香の幸せ奪^{うば}えるほどの存在じやない。

「平氣だよ」

ひとこと言つて、急いで教室に戻つた。

数秒で手を洗つて、走つて恵梨香が追いかけてくるのがわかつた。

それでもあたしは黙つていた。

あたしが席に着いたとき、ちょうどよく授業がはじまるチャイムが鳴つた。

それを聞いた恵梨香は黙つて自分の席に着いた。

はじめて恵梨香と席が遠かつたことを幸いに思つた。

帰りのH.R.がはじまつた。

担任の久住先生は、明日の卒業式に熱が入つてゐるっぽい。

それに比べて生徒たちは、先生の話を無視してそれぞれの時間を過ごしている。

あたしもボーッと先生の話を聞きながら、明日の卒業で違う高校

「通つ」ことになる

恵梨香との別れのことをまた、考えていた。

「起立、礼、さよなら」

最後の中学校での授業がおわった。

「志織ー？帰らつ」

「帰る」

「つむじねり、恵梨香と一緒に帰つた帰り道。

「あしたで卒業だね。やつと義務教育おわるじつ」

恵梨香は卒業が嬉しいと思ってるみたい。

あたしは、そんなプラスには考えられない。

恵梨香みたいに、卒業が辛いものじゃなくなればいいの。

「なんかさあ、長かつたよね」

うん。

長かつたね。

あたしと恵梨香が初めて話したのも、中1の時だし。
家族よつまともに話してると思つよ。

「志織、2次で西高校かつたんでしょう？」

「……うん」

「おめでとうーー志織が高校行けなかつたらビビリよつかと思つ
てた。ほんとおめでとう」

「ありがと」

あたしは1次で1回落ちて、2次でおなじ高校受けたら受けかつた
の。

あたしはもちろん嬉しかつたし、家族も喜んでくれてた。
でもそれ以上に恵梨香は喜んでくれて、本当に嬉しかつた。

「じゃあ、また明日ね」

「うん」

あたしの家が田の前に見えて、あたしと恵梨香は一旦別れた。

「ただいま」

「おかえり。遅かつたわね」

「うん。ちよつと友達と話してて」

家に着いたのは7時半だった。
着替えてご飯食べて、お風呂入って、歯磨きして。
ベットに入ったのは12時を過ぎていた。
そろそろ寝ないと。
つて、思った時。

・ピリリリリ ピリリリリ

携帯が鳴った。

電話は彼氏、隆宏だった。

「やっしゃ！」

「あつ志織。出なこかと思つた」

驚いた声で言つた。あた

今日はまたまた起きてたんだから。

「あらうたのへ..」

「あのれ.....」

たぶん、別れようとか言わざる。
怖かった。

「俺ら上手くいへんえし、わかれためいがこことゆつた

「ひい。

「.....うざ。でもや、赤あやんせ、じつあだまここのへ..」

「降るやう

「……え」

「だいへどひひもひとつどはねてらんねだろ」「ひな

「わうだせび」

「だからとこつて戻すのも無理だ」

「……」

「別に降ろすのへりこどりはいとくなへーか？」

「やんなことないーあたしの初めての赤ちゃんだし、ちやんと
したいこの命なんだよ？」

「じつてことないんだつたうといつくり降りしてるよ。
親にも言わなきやいけないし、陣痛だつて痛いんでしょ?
降りすのなんて簡単だけど、これも命なんだからつ

「……じやあお前がじつにかしら」

「そんな」と言われても「

「俺には重みがあるんだよ」

-ツーツーツーツー

切られた。

そんなの勝手すぎるよ。

男は種ぱらまけば勝手に子供が生まれるけど、
女はその種育てて辛い思いして産まなきゃいけないんだからさあ。

……どうしよう。

……恵梨香……

恵梨香の声聞けたら、がんばれる。

-フルルルルルルル

「もしもし」

「恵梨香……？」

「どうしたの？」

「ほんなん遅い時間」「……」「ぬこね」

「ハハハ。話聞くよ~。」

「……別れたの」

「え?」

「隆志と恋れなきやいかなくなつたの」

「なにそれ?」

「俺には、重いんだって」

「最悪。なにそれ。ひやんと聞く。おしゃべり。」

「ほんなん遅い時間にも関わらず、恵梨香は最後まで話を聞いてくれて、相談にも乗ってくれた。

恵梨香がいてくれてよかつたと思つた。

本当に本当に。

あたしは肩が軽くなつて、そのままひやんと眠れた。

「おはよう志穂」

「ひがみお」

今日の朝は、とっても清々しかつた。
ひらひら舞う桜が綺麗だつた。

卒業式。

ひとりひとりが3年間の思い出を少しづつ思い出しつつ、みんなが
泣いてる。

久住先生も、あたしたちと一緒に泣いてくれて、みんなで記念に
写真を撮つた。

みんなとの思い出に感謝した。

帰り道、あたしは恵梨香とふたりで帰つた。
いつもの道に別れを告げながら、一步一步。

「恵梨香？」

「ん？」

「いままでありがとい。恵梨香がいてくれて、ほんとよかつた」

「……あたしも」

「よく考えたら、恵梨香と別れたとき、いつも笑ってた気がす
る」

「ええ？ほんと？」

「うん」

「じゃあ、約束しちゃう」

「え？」

「あたしたち、高校行って離れ離れになつても、ずっと心友だよ」

「……うん」

あたしは今日、今まで一番泣いた。
恵梨香の言葉が嬉しかった。
恵梨香がすきだから。
だいすきだから。

世界で一番、幸せになつてほしーって。

今日はじめて思った。

(後書き)

どうでしたか！？？

よければ感想お聞きしたいです。

「ううむ、よんでもうださつて、

本当にありがとうございました！――！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2992k/>

Best Friend

2011年10月6日03時28分発行